

『ざり蟹、水辺を遠く離れて』

1975年頃。
東京都内、六畳のボロアパート。

男は部屋の真ん中にあるちゃぶ台で、小説の原稿に向かっている。少し書いては鉛筆を転がし、また書いては鉛筆を転がしている。ラジカセからはビートルズが流れている。
女が仕事から帰ってくる。

「登場人物」

女……実家を飛び出し、高校の同級生だった男と結婚した。

男……小説家を目指す男。高校の同級生だった女と結婚した。

男 女

ねえそこ、
おかえりなさい。

男、ラジカセの曲を止める。

ただいま。そこ、見た？

何？

ざり蟹の死んだの。

何それ。

その街灯の下にね、ざり蟹が死んだの、多分自転車か何かに轢かれて。

えー、可哀想に。

もうぐちゃぐちゃ、ほとんどすり身。

汚いこと言うなよ。

だってそうだったんだもん。

だからって別に言わなくていいこともあるだろう。

女 (玄関の靴を直し)・・・どこから来たのかな。
 男 え？
 女 いや、珍しいなって、
 男 ざり蟹？
 女 うん。
 男 ああ、さあ・・・。
 女 海も川も遠いののに。
 男 誰かが飼ってたのかな？
 女 ざり蟹飼う人なんているの？
 男 いるよ、俺昔飼ってたことあるよ？
 女 そうなんだ。
 男 みんなで釣るんだよ、川で。こう、枝の先にタコ糸でベーコン垂らして。知ってる？ざり蟹って共食いするんだけど、俺が飼ってたのは五十四くらいいたのに最終的には一匹しか残らなくてさ。でもその二匹はちゃんと育てて、最後は川に帰したよ。
 女 へー。
 男 ・・・・あんまり興味ないでしょ。
 女 あ、ごめんなさい。
 男 そりやそうだよ、昔近所の女の子にざり蟹釣りに行こうって言うても来る奴なんてそうそういなかった。
 女 私も行かない。
 男 俺もきつと、ざり蟹釣りについてくるような女の子とは結婚しない。
 女 どうだかね。

男 何だよ、嘘ついてないだろ？
 女 まあ。
 男 ・・・・。
 女 ・・・・道が狭いからいけなかったのかな。
 男 え？
 女 ざり蟹。
 男 どういうこと？
 女 いや、道が狭かったから、ざり蟹のこと避けられなかったんじゃないかって。
 男 ああ、そういうこと。
 女 はあ・・・路地ばかり。
 男 嫌？
 女 ・・・・。
 男 そりや俺らの田舎に比べたら、そうだよ。
 女 片道四車線なんて、そんなに車いないって。
 男 平和だったねえ。
 女 こっちは車の量も多いだろうから、もつと道が綺麗で広いと思っただのに。
 男 ああ、でも片道四車線とはいかないけど、綺麗な道はないわけではないよ。・・・そうか、表参道とか、連れて行ったことなかったか。
 女 うん。
 男 あったかくなったら行ってみようか、けやきの並木が道路の左右にずーっと続いていて気持ちがいいんだよ。服屋や喫茶店もあるし、最近美容室がすごい増えてて、ああ、今度髪でも切りに行く

うか。それに、君は嫌がるかもしれないけど、表参道は路地にある
お店もいいんだよ。

あ、おね、知ってるー。

なんだよ……。まあでも、そりゃそうだな、こういうのはだいた
い女のほうが詳しいもんだ。

こつちに来る前に雑誌で読んだよ、みんな、お洒落で……。

ねえ、行こうね。

……。

なに、またざり蟹のこと考えてるの？

いや違う、ごめんなさい。

どうしたの？

いや、大丈夫。

仕事、疲れた？

そりゃそうだよ、もうずっと立ちっぱなしなんだから。

無理するなよ？

いや、無理するなつて言つてもしょうがないでしょう。

でも体が心配だよ。

うん、ありがとう。

女、男の原稿を覗き込み、

順調？

まあまあ。

女 今日も、家でずっと書いてたの？

いや、ちょっと出かけたよ。だいたい昼頃に起きて、ご飯食べて、
散歩して、で、今。

そう。

今日はいいいお散歩日和だったよー。

そう。

だからほら、これ。

男、一輪のスイセンを取り出す。

どうしたの、これ。

ちようど駅前の花屋にあつて、いいだろ春らしくて。

スイセン？

そうだよ。

かわいい。

たまにはね、花もいと思つて、殺風景な家だし。

くれるの？

もちろん、他に誰にあげるんだよ。

ああ、ありがとう。

食べちゃダメだからね。

え、食べないよ花なんて。

いや分かつてるけど、これね、毒があるんだよ。

へえ。

ほら、茎がちょっとニラに似てるでしょ？

確かに。

男 間違えて食べる人がいるらしいんだよ、道端に生えてるのをニラ
だと思って採ってきたりして。

女 貧乏とはいえ、流石に道端の草は採って食べたりしないかな。

男 俺も嫌だな、野草は。

女 犬のおしっこか、

男 うわ、

女 やだやだ。

男 浮気とかしたら食わされるんだろうな、ニラレバだよーっていつ

女 て、スイセン。

男 する予定あるの？

女 そんな余裕はないですね。

男 締め切りいつだっけ？

女 ……来週。

女 で？

女、原稿を覗き込む。

男は慌てて隠そうとする。

女 順調なんじゃないの？

男 いま良いところだから後でね。

女 良いところなら良いじゃない。

男 いいからいいから。

女 あらすじくらいは教えてよ。

男 今回はね、民族同士の争いの話だよ。

女 おお。

男 地球に隕石が落ちて、

女 地震に津波に火山の噴火、日本はほぼ全てが沈没し、生き残った人

男 たちは原始的な生活を余儀なくされた結果、大和民族とアイヌ民

女 族と琉球民族による醜い争いが起こってみんな息絶える、ついで

男 う。

女 そうなんだ。

男 あの、ほら、ちょっと前にノストラダムスの大予言って流行っただ

女 ろ？あれあれ、あんな感じ。

男 へー。

女 ……あんまり興味ないでしょ。

男 ーん？

女 まあ、好みは人それぞれだから仕方ない。

男 こういうのって、好きな人多いの？

女 そりゃ、ノストラダムスの大予言があんなに売れたんだよ？

男 そっか……。

女 分らないからね、未来のことは誰も。十年後、二十年後、それこ
男 そ明日にだって、俺達が生きてる保証はない。大津波や、明日の雨
女 で川が氾濫することだってありえるし、

男 ここは海も川も遠いから大丈夫ですー。

女 いや、地震や火事だっけいつ起きるか分からないよ。

男 まあ、そうだけど。

女 ざり蟹！あれだっけ何かの予兆かもしれない、こんな所に突然現

女 ちよっと、可哀そうなこと言わないですよ。
 男 え、ごめん。
 女 こんなところで死んじゃって、その上この言われよう。
 男 え、そんなにざり蟹のこと気になるの？
 女 いやそういうわけじゃないけど・・・え、明日雨なの？
 男 え、うん、そうみたいだよ、ラジオで言ってた。
 女 あー・・・流れていっちゃう。
 男 え？
 女 ざり蟹。あのね、体の真ん中が綺麗に轢かれて、手と足だけが残っ
 てるの。だからきつと、体と手と足、ばらばらにどこかいつちやう
 と思う。
 男 おお・・・。
 女 せめて、どこか良いところに行けるといいんだけど・・・はあ・・・。
 男 良いところねえ・・・。
 女 蟹・・・。
 男 蟹？
 女 いや、蟹、食べたいなああって思ってた。ざり蟹ざり蟹言ったら食べ
 たくなってきちゃった。
 男 ああ、田舎の蟹が恋しい？
 女 うん。
 男 俺もなあ、アレルギーじゃなけりゃ食べたいのにな、蟹。
 女 美味しいよ。
 男 家族に言って送ってもらったら？
 女 えー、いいよ。
 男 何で？
 女 男追っかけて家飛び出した娘に送る蟹なんて、あるわけないでし
 よ。
 男 まあ、
 女 だいたい、食べられないじゃない。
 男 いや、俺はいいよ、一人で食べればいい。
 女 いいよ。
 男 だって食べたいんですよ？
 女 でも、一緒に食べられないなら、やっぱり別にいい。
 男 ごめん。
 女 しょうがないよ、アレルギーは流石に。
 男 うん。
 女 ・・・・じゃあ、ご飯そろそろ作るかなあ。
 男 あー俺、まだいいから先に食べなよ。
 女 お腹すいてないの？
 男 うん、あとこれ(原稿を示し)、もう少しやってから。
 女 あー、じゃあ、私も後にしようかな。
 男 え、お腹すいてるんですよ？
 女 まあ。
 男 なら先に食べればいいよ。
 女 いや、いいの。
 男 なんで。
 女 いいの。

男 なんて。
 女 冷めちゃうし。
 男 温め直せば、
 女 いいの。
 男 ……
 女 じゃあ、先に洗濯でもするかなあ……あ、でも明日雨か。
 男 そうだね。
 女 今度にするかなあ。
 男 明後日とかで良ければ、俺やっておくよ。
 女 あ、明後日も何も無いの？
 男 うん。
 女 そっか……
 男 晴れるといいね。
 女 そうだね。
 女、スイセンを持って台所に向かおうとし、

女 ……ねえ、
 男 ん？
 女 この花、何のお金で買ったの？
 男 ……
 女 お財布から五百円、なくなってる、
 男 ごめんなさい。
 女 そうだよな。

男 はい。
 女 私何かで使っちゃったかなって思ってたけど。
 男 ごめんなさい。
 女 ……バレないって思った？
 男 いや、その時は、うん。
 女 そっか。
 男 いやでも、冷静に考えたら、そうだよな。
 女 私をもっとお金持ちだったらバレなかったかもね。
 男 ……
 女 小学生じゃないんだからさ。
 男 はい。
 女 今週バイトは？
 男 行ってないです。
 女 そうだよな、そりやお金無いよね！
 男 はい。
 女 来週は？
 男 ……行きます。
 女 はい。
 男 ほんと、ごめんなさい。
 女 うん。
 女、台所の方へ行こうとし、

女 (自分の靴下を見て) あ、穴、あいてる。

女、手に持ったスイセンを恨めしく眺め、

女
(花びらをむしりながら) 履けない・・・食べられない・・・帰れない・・・。

男、ラジカセから曲を流し、原稿に向かおうとする。

女
ねえ、そこ。ざり蟹の死んだの。もうぐちゃぐちゃ、ほとんどすり身でね、体の真ん中が、綺麗に轆かれて手と足だけが残ってるの。海も川も遠いのに、明日雨が降ったらその体は、遠い川を通ってさ、遠い海に出てさ、いつか私の遠い田舎に辿り着くんだけなあ。私の田舎はおいしい蟹がたくさん採れるからさ、貴方の心もきつと何処かに落ち着くっしょ。ばらばらの体と手と足、どうかそこで会えますように。でもさ、私もほら、海も川も遠いここに、手と足だけが残ってるべ？貴方がもし明日の雨で行ってしまうならさ、ここでこの茎食べてさ、一緒に海、帰ろうかなあ。私、料理には自信あんだわ、だけどさ、一人で食べるご飯はさ、なしてか味が分かんないんだわ。田舎の蟹も、この茎も、ひとりの晚餐じゃ、味気ないわな。

男、呆然と立ち尽くす女に気づき、ラジカセの曲を止め、様子伺う。

男
どうしたの？

女
・・・無いの。

男
え？

女
入れる物が無い。

男、少し考えたあと、

男
ちよつと待ってて。

男、家の外へ靴も履かずに飛び出していく。

女は驚きつつ、様子を伺っている。

外からはゴミ箱を漁るような騒々しい音が聞こえる。

しばらくして、男がジュースの空瓶を持って家に駆け込んで来る。

男は息を切らせながら瓶をちやぶ台に置く。

男
花、

女
え？

男
花、これじゃダメ？

女
あ・・・花瓶？

男
そう。

女、手に持っているスイセンを瓶に挿す。

女
・・・ありがとう。

男
ごめんね、気付かなくて。今度必ず、花瓶を買おう。君が気に入

女 たやつを、
 男 あのね、
 女 大丈夫、絶対に来週からは働くから、
 男 ねえ、聞いて。
 女 ……
 男 やっぱり、ご飯は一緒に食べて欲しいの。
 女 うん、もちろん食べよう。
 男 お腹空いた。
 女 そうだね、すぐ食べよう。
 男 私のご飯って、美味しい？
 女 え、うん、美味しいよ。
 男 そっか、良かった……。
 女 ……大丈夫？
 男 うん。
 女 疲れてるなら、無理して作らなくてもいい。
 男 いや、作る。
 女 そう。
 男 だから、食べて欲しい。
 女 うん。
 男 食べれば、面白いのが書けるかもしれない。
 女 ああ、うん、そうだね。
 男 どの辺りまで書けてるの？
 女 いま……。隕石が落ちた、くらい。
 男 まだまだだね。

男 そうだね。
 女、ゆつくり座り込む。
 男 (靴下を見て) あ、穴。
 女 あとで縫うから置いておいて。
 男 ごめん。
 女 この靴下も、もう何回縫ったかね。
 男 さあ。
 女 そろそろ新しいの買わないと。
 男 いや、いいよ。
 女 だってそれ、高校の時から履いてるでしょ。
 男 ああ、まあ。
 女 もう寿命だよ。
 男 いや、いい、これがいい。
 女 縫いすぎて、そのうち別の靴下になっちゃうよ。
 男 そしたら君が作ったみたいでいいだろ。
 女 まあ、私もそれぐらいしか得意なこと無いしね。
 男 いや、十分過ぎるよ。
 女 ……
 男 ……
 女 ……じゃあ、そろそろご飯作るから、ちょっと待ってて。
 男 うん、ありがとう。
 女 二十分くらいだから。

男 今日は何？

女 ニラレバ。

男 えっ？

女 嘘だよ。

無断複製・転写を禁じます。

作品に関するお問い合わせ、上演許可等につきましては、カミグセ
(info@kamiguse.com)までお問い合わせください。